

2019年アルミ業界重大ニュース

2019年12月26日

(一社)日本アルミニウム協会

項 目	コ メ ン ト
① アルミの水平リサイクル構築に向け、大型プロジェクト始動	アルミ協会が参画しているNEDOの先導研究プログラム事業として、「アルミニウム素材の高度資源循環システム構築」が採択。現状、アルミのリサイクルは展伸材から鋳物・ダイカスト向けといった品質の低下を伴うカスケードリサイクルが主であるが、高度循環利用技術を確立することにより、展伸材から展伸材という品質の低下を伴わない水平リサイクルの構築に向け、大型プロジェクトが始動。
② 東京オリンピックの聖火リレーにアルミが採用	3月、2020年東京オリンピックに使用される聖火リレーのトーチが発表。トーチの素材はアルミで、東日本大震災の仮設住宅の廃材から再生したアルミが使用された。
③ 中国からのアルミ圧延品輸入が急増	財務省の貿易統計によると、1-10月のアルミ圧延品（板、押出、箔）輸入量は前年比+26%と大幅に増加。輸入国としては中国が一番多く、特に板材の輸入が急増（前年比+87%）。米国が中国のアルミ製品に高率のアンチダンピング関税をかけたことが背景にある。
④ アルミ協会、設立20周年記念事業を実施	アルミ協会は日本アルミニウム連盟と軽金属協会が統合し、1999年4月に発足。今年で設立20周年を迎え、5月に20周年記念式典を開催するとともに、「アルミエージ」に20周年記念特集記事を掲載した。専務理事が「アルミニウム」に20周年を振り返る特別寄稿を掲載した。
⑤ アルミ協会、中堅中小会員懇談会を開催	1月、アルミ協会は「アルミ協会執行部との交流の機会を増やしてほしい」との中堅中小会員の声を踏まえ、第1回目の中堅中小会員懇談会を開催（9月には大阪で第2回目を開催）。アルミ産業を取り巻く経営課題や協会運営のあり方などをテーマに、中堅中小会員と協会執行部が自由闊達に意見交換を行うことにより、業界内の意思疎通が円滑になり、連携の強化を目指す。
⑥ OECD、アルミ産業レポートを発表	1月、OECD（経済協力開発機構）は、世界経済の公正競争に関する問題解決のため、アルミニウムについてバリューチェーン全般での政府支援と市場の歪みに関する調査を実施し、そのレポートを発表。世界の代表的なアルミ企業17社への政府支援の合計金額は、2013年～2017年の間に200～700億ドルに達していたことなどがわかった。
⑦ 自動車のアルミ化、着実に進展	10月の自動車向けのアルミ板材は17,761トと月間として過去最高を記録。1-10月期の自動車向けのアルミ圧延品出荷量でも279千ト（前年同期比：+4.3%）となり、アルミ採用車種の増加に伴い、自動車のアルミ化は着実に進展。

<p>⑧ アルミ車両生産実績、2年連続の1,000両超えて過去最高を記録</p>	<p>6月、アルミニウム車両委員会は、2018年度のアルミ合金製車両生産実績を発表。普通鉄道、モノレール、新交通システムの生産総数は1,193両と2年連続で1,000両を超え、過去最高を記録。その内、輸出が419両と3分の1強を占めた。</p>
<p>⑨ ASIへの加入</p>	<p>ASIとは、Aluminium Stewardship Initiativeの略で、アルミ企業（ユーザー含む）の健全性の基準（企業統治、環境、社会的責任）への適合を認証する仕組み。アルミ協会は、9月理事会で協会としての加入を機関決定し、10月に加入。11月に日本の企業として初めて丸紅が加入した。</p>
<p>⑩ アルミ協会、技能実習制度の取り組みに着手</p>	<p>アルミ業界における技能実習生の受け入れを円滑にするため、アルミ協会は技能実習制度の取り組みに着手。3月の理事会で技能実習制度の対象職種に「アルミニウム圧延・押出」を追加するための準備作業を進めることが議決されたのを受け、4月に協会事務局内に「技能実習制度準備室」を設置。8月に圧延・押出に関する技能に詳しい専従者が協会に着任、10月に第1回技能実習制度検討WGを開催するなど、2021年4月の運用開始を目指し、着実に準備を進めている。</p>
<p>⑪ INALCO2019、12年ぶりに日本で開催</p>	<p>INALCO2019の正式名称は第14回アルミニウム接合構造国際会議（14th International Aluminium Conference）で、11月13日～15日、軽金属溶接協会との共催で12年ぶりに日本で開催。国内外から産学関係者約200名の参加があり、異種金属接合等について最新の技術成果や情報の報告があり、盛況のうちに終了した。</p>

以上